



堀船中だより

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標

自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒

《生徒玄関に足踏み式の消毒スタンドが設置されました》

生徒玄関に足踏み式の消毒スタンドが設置されました。ポンプに手を触れずに済むのでより衛生的で安心して使用できます。この足踏み式消毒スタンドの設置は、生徒会役員の発案から始まりました。それを受けて、PTA会長の木村様をはじめ役員の方々がPTAの会議で御検討の上で、生徒会に寄付して下さることになりました。PTAのみなさん、生徒たちの安全・安心のために、本当にありがとうございました。大切にに使わせていただくとともに、今まで以上に感染症対策に努めて参ります。今回は、ただご寄付いただいただけではなく、生徒のみなさんが、自分たちの学校をよりよくしようという思いから自発的に提案してくれたことに大きな意義があるのです。

これからも、自分たちの力を思う存分発揮して、よりよい学校づくりをしていってください。我々教職員も、みなさんの活発な自治活動が実現できるよう全力で応援していきます。



《緊急事態宣言延長に伴う学校行事を変更しました》

緊急事態宣言の期間延長で、引き続きみなさんには制限や自粛をお願いすることになってしまいました。辛抱の日々がもう少し続きますが、みなさんの健康と安全のためにぜひご協力をよろしくお願いいたします。

行 事	内 容
3年校外学習（修学旅行代替）	3月11日（木）に実施 （貸し切りバスを使用）
1/19 2年 校外学習（鎌倉）	3月23日（火）に延期
1/20 1年 校外学習（横浜）	3月24日（水）に延期
3/12 ほりふな祭	大変残念ですが、中止とさせていただきます。
3/19 第65回 卒業式	時間短縮を図り実施 ・卒業生保護者 1～2名、来賓はPTA会長のみ 在校生は代表生徒

感染状況により再度の変更・中止も予想されます。その際には文書またはメール、ホームページ等でお知らせいたします。学校では、施設内の消毒の徹底等、環境整備に万全を期して参ります。

《生徒朝礼 Zoom（ズーム）を使って実施しました》

今朝の生徒朝礼は、Zoom（ズーム）を使って実施しました。マルチルームから、生徒会役員・各種委員会委員長より、パソコンのZoom機能を使用して、各教室のICT黒板に映しました。代表の生徒の皆さんは、パソコン画面の前で多少緊張気味でしたが、みなさん堂々と今月の目標や取り組みについて話していました。今後は今まで行っていた放送朝礼から、Zoomに切り替えて行ってまいります。



滝乃川学園と渋沢栄一つながり

北区滝野川一丁目の明治通り沿いに「滝乃川学園跡」の表示板があります。この滝乃川学園は、日本で初めての知的障害児のための教育施設として設立されました。学園創立者の石井亮一は、キリスト教精神に基づいて知的障害の教育・研究に生涯を捧げ、日本の「知的障害者教育・福祉の父」と呼ばれた教育者です。

学園の起こりは、明治24（1891）年に発生した濃尾大地震で孤児となった女児たちを石井が引き取ったことから始まります。この中に知的障害の子どもがいたため、石井は「孤女学院」を設立し、障害児の教育と福祉に力を注ぐべく決意したのです。滝野川の地に園舎を建て、明治30（1897）年に「滝乃川学園」と改称しました。敷地内には寄宿舎や教室、礼拝堂などがあり、健常児と障害児のそれぞれに教育を行う2つの教育部が設けられ、同時に教員・保母の養成も行われました。西巢鴨の庚申塚への移転を経て、昭和3（1928）年に現在の学園がある国立市谷保へと移転しています。

妻の石井筆子は、文久元（1861）年、長崎の有力士族の家に生まれました。東京女学校に学び、フランス留学などを経たのち華族女学校での教育などに関わり、日本の女子教育の確立に大いに貢献しました。1898（明治31）年、日本女性代表として津田梅子（津田塾大学の創立者）とともにアメリカに渡り、女子教育・社会事業視察も行っています。フランス語や英語を流暢に話し、ドイツ人医師ベルツやフランス人法学者ポアソナードからも称賛された華やかな近代女性でした。

最初の夫との死別を経て、1903（明治36）年に石井亮一と再婚。最初の夫との間にできた子に知的障害があった筆子は、理想を同じくする亮一を公私ともに支え、苦しい財政の中で学園運営を担いました。懸命に教育に励む筆子でしたが、1920（大正9）年の秋のある夜に発生した火災が彼女の運命を翻弄します。失火原因は、火の怖さを知らない園児の火遊びでした。燃えさかる火に飛び込み、足に大怪我を負いながら必死の救出活動を試みた筆子でしたが、力及ばず、六名の園児が命を落としました。園児たちを救えなかったことに石井夫妻は深く心を痛め、焼失した学園の廃止を決意します。このことは、道徳科の教材「鳩が旅立つ日」（文部科学省）でも扱われています。しかし、学園の廃止を知った人々からの励ましの声と義援金に支えられ、滝乃川学園は財団法人としての存続が決定し、理事長に渋沢栄一を迎えることとなりました。

「滝乃川学園百二十年史上巻」には、「子爵渋沢栄一翁は学園理事長となり、翁は、世間周知の日本財界の巨人、老後の身を軽くしたいと願って一切の公職を去っていた渋沢が『石井さんの事業だけは、経営の労を省いて教育に専心させてあげたい』と言って快諾し、大正10（1921）年～昭和6（1931）年11月に没するまで10年4ヶ月理事長を勤めた」とあります。実は栄一は、維新直後の大蔵省で筆子の父・渡辺清と席を並べた間柄でした。また筆子自身も、東京女学校の学友であった栄一の娘・歌子と終生の友として交わっていました。そんな縁もあり、栄一は理事長を引き受けたのでしょう。

巢鴨で栄一を出迎えた亮一は、度重なる労苦に見違えるほど痩せ細り、元気を失っていたといいます。傍らで寄り添う筆子に、栄一は、「上州渋川の奥の四万温泉に2週間ほど行ってきなさい。多少不便な山の湯だが、どんな名医にかかるより効き目があると我が故郷では評判だ。石井君の神経と胃腸にも、お筆さんの足の怪我にも効き目抜群、騙されたと思って行きなさい」と優しく語りかけました。これが渋沢理事長から亮一に出た初の出張命令だったそうです。

晩年の安寧な暮らしを破り、弱者を守る活動に躊躇なく身を投じた栄一。石井夫妻との絆に、その人となりを改めて感じることが出来ます。



北区滝野川の園舎と礼拝堂 滝乃川学園提供



石井亮一・筆子夫妻 滝乃川学園提供